ある戦士の墓標

ある戦士の墓標 2　告白

じょうじ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15603887

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイの大冒険, ダイ大小説50users入り

拝啓ヒュンケル様。
今週末は結婚式ーーーは戦後に改めて行うとして、とりあえず結魂式ですね。式場はもう準備ができておりますが、次回予告を拝見する限り、新郎様は週末到着とのこと。数秒映ったお顔でご覚悟の程を感じました。新婦様は亡きお父様に代わって弟弟子様とヴァージンロードを進まれるご様子。これは嫉妬や牽制などではなく新婦様の「弟みたいなもの」というお気持ちを尊重なさってのことと推察いたします。小中高大までの先生も厳しくも的確な祝辞を用意されていると聞いております。
お式は二週に渡って執り行われると思っておりますが、楽しみです。敬具

ほんと、アニメが楽しみで一週間頑張れるという子供の頃の気持ちを思い出させてくれてありがとうございます。

このお話のあなたがかっこ悪くてごめんなさい。でもあなたの魅力を考えたとき、クールなところじゃなくって限界突破でぼろぼろでがんばる姿が好きなのだと気が付きました。次回もあなたはうっかりしますが、最後には決めてくれると思います、マァムが。

※前回までのブクマ、コメント、いいねありがとうございました！
励みになっています(*^_^*)

ある戦士の墓標 2　告白

翌日。
この日の孤児院の午後は、いつものお勉強とお外遊びの予定を変更して、牧場遊びになった。

午前中に牛乳を届ける名目でマァムの様子を見に来た牛飼いの妻のアンナが、彼女がひどく疲れていることに気がついたからだ。

大丈夫だと笑ってみせるマァムに、アンナは首を横に振った。

「子どもは大人のことをよく見てるんですよ。マァム様が疲れてるの、きっと気がついてます。だからちゃんと休んでください」

３児の母親でもあるアンナの言葉はマァムにも心当たりがあった。

そんなわけで、今日はリクシーを含めた子どもたちをアンナの夫と子どもたちに見てもらい、マァムはアンナ宅の客間で休ませてもらっている。

少しだけ開けた窓から入る風がペールグリーンのカーテンを翻し、わずかに春が終わる気配がした。

（なんであんなことになっちゃったんだろう）

一昨日はうまくやれてたと思う。
昨日も夕食まではよかった。彼の部屋にお酒を持っていったときも、最初はよかった。

たしかリクシーがヒュンケルの実子ではないと確定して、何かが胸につかえた。
そこから歯車が狂い始めた。
「お前を欲しがらない男がいるわけないだろう」なんてどの口が言うんだと思った。
でもその後の「あなたとお付き合いしていた時より幸せ」なんて明らかに言い過ぎだ。

「マァム様、おくちあけてください」

アンナの優しい笑顔につられて言われるがままに口を開けると、柔らかくて甘いものが飛び込んできた。
口の中に広がるのは初めての感覚。甘いだけじゃなくて、ちょっとだけしょっぱくて、コクがあって、歯を立てるとぐにゃりと変形して、味が一層濃くなる。

「アンナさん、これなんなの？」

憔悴していたマァムが急に目を輝かせたことに、アンナはにっこりと笑った。

「キャラメルって言うんですよ。うちの牛乳にお砂糖とバターとほんのちょっとのお塩を混ぜて、ゆっくり煮詰めるんです。
量はできないから、うちでは子供のおやつでなくて、大人のご褒美にしてるんですよ」

このところお忙しそうだったから、と言いながらカップにお茶を注ぐアンナに、マァムは鼻がつんとなった。キャラメルの甘さよりも、アンナの優しさに疲れがゆるゆると抜けていく。

（きっとあの『お兄さん』のことなんだろうな）
アンナはある程度二人の関係に察しがついていた。兄と、兄のようなもの、では天と地ほどに違う。

アンナは昨日の朝牛乳を届けに行ったとき、子供からマァムの部屋におとこのひとがいた、と聞いた。それで彼女は泥棒でも入ったかと思ったのだ。だってマァムにはこの八年浮いた噂一つなかったから。
だからマァムに直接確認したら、たしかに古い知人が子どもを預けに来たのよ、という。
でも釈然としなかった。だって古い知人、しかも男を私室には泊めない。

結局アンナは夫に相談して、夫が村長に相談して、男に話を聞くことになった。

やがてやって来たのはマァムとは正反対の厳しい雰囲気を纏う男前だったが、アンナの目を何よりもひいたのはその首に下げられたネックレスだった。彼女は全く同じものをマァムが大切に身に着けているのを知っていたから。

そこからは猛烈に腹が立った。
おそろいのネックレスをして、私室に泊まるような男が、他の女との間の子供を預けに来る。
最低だ。それは人として、男としてどうかと思った。
その結果苛立ちで男を問い詰めてしまい、場の雰囲気を悪くしたことをアンナは大変反省している。

そんな彼に対する見方が少し変わったのは、彼の「マァム」という

声を聞いてからだ。

彼女が作るキャラメルよりも甘くて蕩けそうなその声は、それだけでこの男がマァムをどう思っているかを何よりも雄弁に語っていた。

だから、マァムを褒めてやりたい、という言葉にアンナはいろんな話を聞かせた。だがそれは間違えだったのかもしれない。

だって褒められたら、マァムはこんなに憔悴していないはずだ。これまで孤児院のことでどんなに疲れていても、マァムはきちんと自分で立ち上がってきた。もしかしたら自分が話した何かがきっかけで、マァムを傷つけてしまったのではと、彼女は責任を感じていた。

「マァム様、リクシーはいつまでいる予定なんですか？」
テーブルにアンナがそっとお茶を置く。マァムはありがとう、と言って、それに口をつけた。
「他の子たちと一緒でとりあえず15歳までかな」
「・・・父親が健在なのに、受け入れてくれないんですね」
「それが彼は実の父親じゃないのよね」
「え？」
「昨日気がついて夜確認したんだけど、彼は天涯孤独になったリクシーを連れてきただけなのよ」

マァムはお茶を飲んでいた手を止めた。
アンナがわなわなと震えていたからだ。なぜかはわからないけど、とても怒っている。

「どうしたの？」

「いま、気がついた、っておっしゃいました？確認したっておっしゃいました？」
「う、うん」
「そんな大切なこと、あの男はマァム様に黙ってたんですか？」

いつも子供たちを厳しく躾けている彼女だけど、他人に対してこんなに怒りを露わにすることは珍しい。ここにいないけど怒られているヒュンケルがかわいそうになって、マァムはつい弁護してしまった。

「彼も実の両親を早くに亡くして、養父に育てられたのよ。だから親子関係の血の繋がりっていう部分が曖昧になっていると思うの」

「そういう問題じゃないんです！」

マァムはアンナの怒りに気圧された。けれど何をそんなに怒っているかがわからない。
戸惑いを隠せないマァムに、アンナは先程までとは打ってかわって困ったような表情を見せた。

「いいですか。人は誰かを傷付けない為に、時に嘘をついたり、隠し事をします。だけどこれはその逆なんです」

アンナはマァムの両手を取ると、自分の両手で包んだ。これからくる衝撃をすこしでも抑えようとするかのように。

「大切な事実を知らないことであなたが傷付くことに気がつかなかった。配慮に欠けています。残酷に言ってしまえば、蔑（ないがし）ろにされたんです。これは怒っていいことです」

ああ、そうか。
マァムはやっと理解できた。

アンナの怒りの理由が。
そして昨日から胸につかえていた思いの正体が。

この思いの正体は絶望。

すとんと腹に落ちたとき、急に視界が滲み、心の裡が零れた。

「こい、びとだったの・・・」

涙は、理解よりも早かった。
昨日ヒュンケルの前では出せなかった思いが、涙となってぽろぽろと流れていく。
滲んだアンナの顔も歪んでいた。

「でも、手紙だけ置いて・・・行っちゃったの・・・。わたし・・・ありがとうも、さよならもいえなくて・・・」

マァムは震える手でアンナにすがりついた。そうしないと、座ることも息をすることもできない気がした。アンナはそんなマァムの背中をぎゅっと抱きしめた。

「わかってた・・・これが、わたしのためだって・・・。でも彼を

しあわせにできなかったのが・・・とてもかなしくて・・・。だから神さまに祈ったわ・・・だれか・・・彼をしあわせにしてくださいって・・・」

嗚咽が交じるマァムに告白に、アンナもまた鼻声でうんうんと応えた。それが、マァムの心の裡の吐露を促してくれる。

「リクシーを見たとき・・・嬉しかった・・・。やっとこの人は救われたって・・・。ほんとうよ・・・。なのにわたし、わたしがいちばんじゃなくなったことが、悲しかったみたい・・・」

不意打ちのような再会だった。
もう一生会うことがないと思っていたヒュンケルの、父親として振る舞いを見ても耐えることができたのは、そうなることを毎日祈って、そんな姿を想像していたからだった。

けれどその祈りが届くということは、彼の心の中で自分が小さなものになる、ということまでは考えが及ばなかった。

まして「お前を欲しがらない男がいるわけないだろう」と言われるなんて。自分とのことがまるで何もなかったかのように隅に追いやられてるなんて想像していなかった。

そのことを目の当たりにして、絶望してしまったのだ。

気がつけば、アンナが背中を優しく擦ってくれていた。遠くで子どもたちの声がかすかに聞こえ
た。その明るい声にマァムはゆっくりと平常心を取り戻していった。

どんなに傷ついても、絶望しても、私には、やらなくちゃいけないことがある。
今は自分よりも優先して守るべきものが、ある。

マァムが取り乱してごめんなさい、とアンナから離れようとすると、思いがけない強い力で抱きしめられた。

「マァム様はお優しいから、相手を優先してしまうことがありますよね。
でも私、恋人とか夫婦はそれじゃだめだと思うんです。対等でいなきゃ。つらいことはちゃんつらいって言わなきゃいけないと思うんです」

アンナは抱きしめる手に力を込めた。伝われ、がんばれ、と思いながら。

「あの人はまた来るでしょう。リクシーに会いにね。そしてあの人は帰ってしまえば日常に戻るでしょうけど、マァム様は悲しみを引きずってもここで子どもたちを守らないといけません」

だからね、とアンナはマァムの体を離すと、肩をポンポンと軽く叩いた。

「横っ面をひっぱ叩いて、さよならって言ってやればいいんです」
「横っ面をひっぱ叩くの？」

アンナの言い回しが面白くて、マァムは笑った。笑うと肩から力が

抜けた。

「ええ。今からでも遅くないんですからね」

アンナの言葉に、マァムは小さく頷いた。

同じ時刻、ヒュンケルは聖堂にいた。
マァムに今日も村を散歩でもしてきてほしいと言われたが、気は進まなかった。
だから誰でもいつでも入れるという聖堂で時間を潰すことにした。

村の一番の自慢だという聖堂はたしかに素晴らしかった。
決して大きくはないが、青と白を基調とした精緻な細工が施されたステンドグラスから差し込む光は、まるで天上の絵画のようだった。

この光に、結い上げたあの美しいピンクの髪と白いドレスはさぞかし映えるだろう。薬指に嵌められた指輪はきっと永遠の幸せを約束してくれるはずだ。だがその日、もっと輝くのはステンドグラスでも指輪でもなく、花嫁の笑顔のはずだ・・・・・・

静寂が大理石でできた柱や壁に染み入るような聖堂で、ヒュンケルは束の間、そんな幻をみた。

そしてそのオリーブ色の目を閉じる。

だが自分がそれを目にすることはない。
明日にはここを去る。

近づけば傷つける。事実昨日もそうなってしまった。
彼にとって八年ぶりの再会は改めてそれを確認する機会となってしまっていた。

そのとき、入り口で気配がした。

「こんにちは」

のんびりとした声は村長のものだ。
村長はゆっくりと聖堂に入り、通路を挟んだヒュンケルの隣に座った。

「アバンの使徒のお一人、ヒュンケル様とお見受けしますが、間違えありませんかな？」

マァムは村長はマァムがアバンの使徒だと知っていると言っていたから問題ないだろう、そう判断してヒュンケルは頷いた。

「昨日は大変失礼しました。さぞご不快でしたでしょう」
「いいえ。私は咎人ですから。それより妹弟子がここで愛されているのを知って安心しました」

村長はかすかに片眉をあげたが、ヒュンケルは気が付かなかった。

「彼女たちは、あなたが花盗人ではないかと恐れていたのですよ」
「花盗人？」
「ええ。マァム様はもうこの村に根付いた花ですから」

ヒュンケルはわずかに口端をあげた。
その花をかつて自分は手折った。だがどこにも連れて行けず、置き去りにしてしまった。だから今更自分がマァムを盗み出すなんてあるわけがない。

「そんな日は来ません」
「花はお嫌いですか？」
「自分には過ぎるものです」
「あなたが咎人だから？」

ヒュンケルはステンドグラスを見上げた。
ここに神がいるかはわからないし、いたとしても自分が赦されるとは思わない。だがこの清浄な光はマァムにも話せなかった咎人の告白を聞いてくれるかもしれない。

「八年前、目の前で女性が襲われました。襲撃者は十才になるかならないかの子供で、目的は私に対する復讐です」

それはマァムとそういう関係になってからしばらく経った頃。

「その女性は何の関係もない人です。なのに私とたまたま一緒にいただけで狙われました」

あの日のことはよく覚えている。
天気のいい、昼の出来事だった。視界も悪くなかった。剣も持っていた。体の調子もすでに三割方戻っていた。

なのに襲撃を事前に防げなかったのは、相手が子供だったからだ。
まだ幼さの残る子どもが何の罪もない女性に対してナイフを振り上げるなど、予想できなかった。

「父親を不死騎団に殺された子供でした。おまえを殺してやりたい

が、力がない。だからおまえの側にいた女を狙った、と言っていました」

いつか他人へ向けた刃が自分に向けられる日が来ることを予想しなかったわけではない。

だがその凶刃は本当に自分に向かうのか。
マァムに向かわないと言いきれるか。
将来恵まれるかもしれない小さな生命に向かわないと言いきれるか。
悪に身を染めた頃は惜しいものがなかったから考えもしなかった恐怖が、守りたいものができたときに形になって現れた。

「私も戦争孤児です。養父の仇に剣を向けました。だからわかります。自分は死ぬまで生命を狙われ続ける。それに大切な者を巻き込みたくない」

初めて人間を怖いと思った。
しかし自分も愛するものを奪われた身であるからこそ、その子どもの気持ちがよくわかった。
そしてこの復讐は生涯続くのだということも。

幼子をさえ理不尽な凶行に走らせてしまった己にほとほと嫌気がさした。慈しみに満ちた瞳で子供たちを眺めるマァムには言えなかった。

だから説明もせず、ただ彼女の元を去った。
置手紙で別れだけを告げたのは、きっと彼女は事実を知ればそれで

もいいと言うだろうと思ったから。私もあなたを守る、私も一緒に戦える、と。
だが愛ゆえに自分にナイフを向ける力なき者を、彼女が傷つけて苦しまないとは到底思えなかった。自分を守れば守るほど、マァムはきっと壊れていく。

「私は人を幸せにすることができません。
　だから私が花を盗むことはありません」

村長は目を瞑った。
この青年もその決断に至るまでに悩み、苦しみぬいたはずだ。
自分に言えることは何もない。
だが、孫娘のようにも思える、村の大切な一輪の花の願いも知ってほしかった。

「それでもマァム様の心の中にはあなたがいると思いますよ」

ヒュンケルは眉根を寄せた。マァムは村長は自分がアバンの使徒であることを知っているとは言っていたが、自分たちの関係まで喋るとは思えなかった。

そのヒュンケルの心を知ってか知らずか村長は続ける。

「『ここにいる子供は私の大切な人がこどもだった頃と同じ存在です。だからみんな愛しい』
それからこうも言っていました。
『私は好きな人の子供を生むことはないけど、好きな人に似た子供たちを育てられて嬉しい』」

ヒュンケルは目を見開いた。

「そもそも、人を幸せにする、というのは簡単なことではないのですよ。みんな誰かを幸せにするために、戦っているんです。こんな老いぼれでも」

村長はヒュンケルにもう一度問うた。

「あなたはもう、戦うことを止めてしまったのですか？」

その日の夕食後、客室に戻ろうとしていたヒュンケルの前にマァムが立った。

今日は朝から視線すら合わなかった。けれど今のマァムはまっすぐにヒュンケルを見つめている。

「今日、リクシーを子供部屋で寝かせようと思うんだけど、いいかしら？」

「おまえに任せる」
「それと」
マァムは一瞬言い淀んだが、すぐに意を決したようにヒュンケルを見据えた。

「夜、私の部屋に来てほしいの。
　私、あなたとちゃんとお別れしたいの」

いつもより多めに蠟燭の火を灯す。
いつもより丁寧に髪を梳かす。

小さなテーブルにはクロスをひいて、その上にグラスとお皿とカトラリーを二人分。
それから男の人が好きそうなおつまみを少しだけ。
ワインも置くけど、これは最初の一杯が終わればたぶん飾りになるだろう。

そう、これは私達の最後の時間のための装飾。
置手紙よりよっぽど気が利いているでしょ？

マァムがちょうど腰まである髪をひとまとめにしたとき、控えめなノックの音が聞こえた。
寝間着に上着を羽織ってドアを開けると、約束通りヒュンケルがいた。
横っ面をひっぱ叩くのをやめたのは、最後の夜を片頬が赤く腫れた顔で過ごす彼を想像したらなんだか笑えてしまったから。

「リクシーはもう寝たわ」
ヒュンケルを部屋に招き入れ、椅子に座るように促す。
「今日は子供用のベッドを全部つなげたの。みんなパーティー気分よ。しばらく興奮してたけど、今はもうぐっすり寝てるわ」

向かい合わせに座ると、マァムは二人分のグラスにワインを注ぐ。
一杯はなみなみと、もう一杯にはその半分。
注ぎ終わると、なみなみ注いだほうをヒュンケルに進めた。

「乾杯していい？」
「何に対してだ？」
「再会とお別れに対して、かな」

一度持ち上げたグラスをヒュンケルは置いた。

「オレはもうここに来ないほうがいいか？」
「ううん。リクシーに会いに来てくれるのはいつでも歓迎する。ただ、二人でこんなふうに過ごすのは今日が最後だから」

グラスを持とうとしないヒュンケルにマァムも持っていたグラスを置きそうになった。けれどそのとき、アンナの言葉を思い出した。

『対等でいなきゃ。つらいことはちゃんつらいって言わなきゃいけないと思うんです』

マァムはぐっと奥歯に力を込め、グラスを前に突き出した。

「あ、あのね、私、最後があんな形で、ちゃんと話せなくて、すごく引きずってるの。だから私、ちゃんと終わらせたいの！」

ヒュンケルは目を見開き、そして顔を歪ませて頭を垂れた。

「本当に、申し訳なかった・・・」

深々と下げられた灰色の頭にマァムは慌ててしまった。

「やめて、やめて、今夜は楽しく過ごしたいから。とりあえず乾杯しましょ！」

マァムの言葉に、ヒュンケルはやっと顔を上げてくれた。だが寄せられた眉根や瞳の険しさからは後悔や悲しみを必死に抑えているのがわかった。

「ヒュンケル、笑って・・・。お願い」

最後の夜なのだ。だから。

懇願するようなマァムの声音に、ヒュンケルはようやくグラスを手にとった。そして深呼吸を一つした。
息を吐き切ったとき、彼はもう穏やかな、それでいてどこか泣きそうな顔をしていた。

「再会と別れと、また会えることを願って、でもいいか？」

「ええ。もちろん。いつでも来てね」

カチン、と小さな音が響いた。
マァムは少し飲み、ヒュンケルはグラスの半分ほど飲んでいた。

苦くて美味しくない、とマァムは思う。でもまだお酒が飲めなかった少女の頃、いつか大人になったらヒュンケルと飲みたいと思っていた時期があった。思っていた形とは違うけれど、あの頃の望みが一つ叶って、少し嬉しかった。

「あのね、ヒュンケル」
グラスを置いて、マァムは切り出した。

「さっきも言ったけど、あんなふうにあなたが行ってしまったことがとてもショックだったの。
私、あなたに伝えたいことがあったから。いま、聞いてもらえるかしら？」

ヒュンケルは無言のままコクリと頷いた。

マァムはそんな彼を見つめた。
彼の瞳にはどんな罵詈雑言でも全て受け止めるという覚悟があった。

それを見てから、マァムは一瞬笑みを浮かべ、すぐに口元を引き結んだ。
少し震える手を膝の上で揃え、そして長い間伝えられなかった、あるいはもう伝えることはないと思っていた言葉を胸の奥底からそっと取り出した。

「私に『自分のための愛』を教えてくれてありがとう」

ヒュンケルは瞠目した。
オリーブ色の瞳に浮かんだ驚愕と混乱はとても隠しきれず、彼を少し幼く見せた。

マァムはそんなヒュンケルに、慰めるように笑いかけた。
そういえば、冷静沈着と言われていた彼の、ときおり見せるこの表情がたまらなく好きだった。

「あなたは私を大切にしてくれた。最後の去り際まで、あなたは私を思ってくれていた、と信じているわ」

別れは悲しかった。それは今まで引きずっていたほどに。けれど恨んだことはなかった。その去り方が彼なりの最後の愛情表現なのだと信じていたから。そしてそれを信じることができたのは、それまで彼がどれほど自分を愛しんでくれたか、ちゃんとわかっていたからだ。

「恋の喜びも悲しさも、切なさももどかしさも、痛みも苦しさも、あなたしか教えてくれなかった。知れてよかったと思うわ」

そう、これは私の最初で最後の『自分のための愛』。
人生一度きり、特別な彩りを与えてくれた特別な愛。

「だからね、ありがとうヒュンケル」

マァムはふう、と息を吐いた。
爽快だった。満足だった。
ずっと抱えていた重い荷物をやっと降ろせた気分だった。

これでようやく終われる、そう思った。

「浮かれていたんだ・・・」

「え？」

それまで氷のように固まっていたヒュンケルが突然口を開いた。
しかし彼らしくない、何の脈絡もない話にマァムは不思議そうに小首を傾げた。

「リクシーを見つけて抱き上げたとき、浮かれてしまった」

ヒュンケルが父バルトスを何よりも大切に思っていたのは知っている。だからバルトスと同じ風景が見れたのは、彼にとって浮かれるほど嬉しかったことだろう。

「あなたもバルトスのようにいい父親よ」
「いや、そうじゃないんだ」

ヒュンケルは目を伏せ、グラスをテーブルに置いた。

「これがもしおまえの子どもだったら、愛おしいという言葉で足りるだろうか、と想像したからだ」

マァムは小首を傾げたまま止まってしまった。
なぜここに自分が出てくるか全くわからなかった。

「とうさん、と呼ばれて、その子がもしオレの子どもでもあったら、と夢想した。オレはそんなありもしない幻想に焦がれて、浮かれてしまったんだ」

何の話をしているのだろう。マァムは眉根を寄せてヒュンケルを見つめた。混乱していた。話は耳には入っては来るが、理解ができない。

「リクシーをここへ連れて来るのを誰かに依頼してもよかった。だが自分で連れて来たのは、それを口実にしてでもおまえとおまえの子どもをひと目見たかったからだ」

ヒュンケルは目を閉じた。
眼裏（まなうら）に焼き付いている、昨日のマァムの姿。
子どもを抱きかかえ、自分を見つけて微笑む最愛の女性（ひと）。
自分の生命さえ武器である自分の唯一の執着。
すべてと引き替えにしてでも欲しかった未来。

「たとえ他の男との間に生した子どもであっても、おまえとおまえの子どもを見てみたかった」

ヒュンケルは静かに目を開いた。
対面に座るマァムは可愛らしく小首を傾げている。しかしその表情は何か難しい問題でも解いている途中で固まっているかのようで、自分の意思が全く伝わっていないのがわかった。
ヒュンケルにはそれすら愛おしかった。

つまり、とヒュンケルはマァムを見据えた。

「オレはいまだにおまえを愛している」

小首を傾げたまま固まっていたマァムの瞳が見開かれ、涙が溜まっていく。そしてそれが溢れ出すのをヒュンケルは見た。
頬は微かに上気し、柔らかな唇は引き結ばれた。
呼吸に呼応して肩が上下し、頬を伝う涙が幼い子供のように手の甲で拭われた。

そして再び潤んだ瞳が見えたとき、ヒュンケルは悟った。

だめだ、と。

この人からの、この言葉を、私はずっと欲しかった。
もし八年前に聞けていたら、せめて私がここに来る前に聞けていたら、何の躊躇いもなく、あなたに飛び込めたのに。

「私・・・この八年で、もうひとつ、あなたに伝えたい言葉ができたの・・・。それはね、『今の私の生き方をくれてありがとう』っ

てこと」

マァムは両手で顔を覆った。
ヒュンケルを見ることができなかった。

「昨日話した、失恋してここに来たっていうのは嘘よ・・・。本当は、あなたがすべきだけど、あなたができないことをしたかった。それが孤児院だったの」

ヒュンケルが奪った生命は取り戻すことはできない。けれど遺された生命を慈しみ、守り、育てることはできる。それはきっと慈愛の魂を持つという自分の天命だったのだろう。

ヒュンケルを追いかけることはしない。
マァムは自分にできることやると決めた。

「子供を預かるって、私が想像していた以上に大変だったの。赤ちゃんは何をしても朝も夜も泣き続けるし、反抗期の子なんて憎まれ口しか言わないし。でもね、挫けそうになる度に思い出すの」

マァムは大きく息を吸った。
あなたが私にくれたもの、それを伝えるために。

「あなたの闘志の魂を。
　何度倒れても、絶対に立上がるあなたの姿を」

見つめ合った瞳から、重ね合った手のひらから、互いの名前を呼ぶ声を捉えた耳から、触れ合った唇から。
いや、初めて会ったあの日から敵として、兄妹弟子として、恋人として交差した二人の魂がそのままに。
いつしかヒュンケルの魂のほんの少しがマァムに移り、それはしっかり彼女の中で根を張った。

その魂の力がマァムを支えている。

「あなたはリクシーに私の子どもの幻を見たけど、私にとってここの子供たちはあなたと同じ存在で、その存在をあなたの魂と一緒に守っている。

だから、今の私には『自分のための愛』よりも、孤児院（ここ）が大切なの」

そう、だから。

「ごめんなさい」

ここ数日の自分のなんと脆かったことか。
ヒュンケルの魂に支えられてどんな困難も乗り越えてきたと思っていたのに、過ぎさった過去に心を焼かれ、周囲のひとたちに迷惑をかけてしまった。

自分は強くあらねばならない。

なのに彼がここにきてから自分は泣いてばかりだ。
もし今この手をとって、またヒュンケルが去るような事があれば、私はきっと立ち上がれなくなってしまう。それは繰り返してはならない。
だとしたら、諦めるべきは。

「妬けてしまうな」

しばらくしてマァムは頭に大きな手のひらを感じた。
気がつけば対面に座っていたはずのヒュンケルが横で頭を撫でてくれていた。

懐かしい、兄弟子の手の平。
武器を持つ人特有の硬いけれど、自分よりも高い体温の手が心地いい。
もうこんなふうに触れられることはないと思っていた。

「子供たちは幸せだ」

うん、とマァムは両手で顔を隠しながらも大きく頷いた。子供たちを全力で愛している。それには自信がある。

頭を撫でてくれていた手がふと止まり、傍らで動く気配があった。

「マァム、おまえは幸せか？」

さっきよりも顔の近くで聞こえたその声はひどく静かで、優しかった。
マァムは再び大きく頷いた。
昨日彼に言ってしまった、今のほうが幸せ、というのは嘘でも強がりでもなかった。

ヒュンケルに申し訳ないと思う。
彼をきっかけに選んで、彼に支えられている今の生き方で、自分はこんなに幸せなのに、彼を幸せにすることができなかった。

ごめんなさい、と言いかけたとき、もう一度声が聞こえた。

「オレも幸せだ」

マァムは驚いて顔をあげた。
顔を隠していた両手をさげ、ヒュンケルを見た。
こんなことを言う人ではなかった。
むしろ幸せになることを拒んでいるような人だった。

ヒュンケルの顔は思ったよりも近くにあった。片膝をつき、マァムの視線に合わせてくれていたおかげで、彼の瞳をしっかりと見ることができた。
その瞳に嘘はなかった。

「人を愛することで自分が幸せになれるとは思わなかった」

マァムはヒュンケルへ腕を伸ばした。
そして両頬に両手の指先を添えた。
それから顔を近づけ瞳を覗き込んだ。少しバランスを崩した体を、ヒュンケルはそっと支えた。

「ほんとうに？」

らしくない人のらしくない言葉に、マァムはまだ信じられないでいた。

「オレの闘志の魂がおまえに移ったというなら、おまえの愛の魂もオレに移ったのだろう」

どんなに覗き込んでも、ヒュンケルの瞳には嘘がない。
いつも瞳の中に抜き身の剣があるような人だった。それは人を傷付けることはなかったけれど、いつも彼自身を苦しめていた。
それが今はない。あるのは穏やかで、優しさと、悲しさと混ぜたような不思議な光。

マァムは抱きしめるようにヒュンケルの首に両腕を絡めた。
少し昔と違う感覚がするのは、自分の腕が細くなったからなのか、彼の首が太くなったからなのか。

「リクシーね」

思えば再会したとからそうだった。

幼子を寝かしつける背中はとても穏やかで、あれを幸せと呼ばずして何を幸せと呼べるだろうかとと思えた。

「よかった」
力が抜けて、つい太い鎖骨に顔を寄せてしまった。急に眠気が襲ってきた。
このところ考えすぎでよく眠れなかったし、お酒も飲んでしまった。何よりもずっと祈っていたことが叶って安心した。

ためらいがちな手に、抱き寄せられた。
そこはとても懐かしくて、落ち着ける匂いがした。

やがてマァムが突然身を崩した。
ヒュンケルが慌てて抱きとめると、彼女は眠っていた。

思いがけない終わりに、ヒュンケルは呆気にとられ、それから、ふ、と笑いをもらした。

起こさぬようにゆっくり抱えあげ、そっとベッドに横たえる。跪き、薄いブランケットを静かにかける。

そして視線を返すことのない顔を見つめた。
少女の頃の面影そのままに、幼さだけが抜けた女性の顔だった。涙の痕が残ってはいるものの、その表情はとても穏やかだ。

卑怯だとは思いつつ右手を伸ばした。

一瞬ためらい、けれどその左頬に触れる。
かつて馴染んだ肌は変わらず柔らかだった。

そして人差し指だけを薄く開いた唇に触れさせようとして――――
そこで止めた。

美しくなったと思う。
けれどこの女性（ひと）は昔から変わらない。
自分に向けられる愛情にどこか鈍いままだ。

ヒュンケルは幾筋かのピンク色の髪がかかる耳に唇を寄せた。

「マァム、おまえだ」

他の誰でもなく。
それが芽生えた時から最期のときまで。
幸福など許されぬと思っていた自分にそれを与えてくれたのは。

そして何度も死線をくぐり抜けたこの身と同じく、この『自分のための愛』もまた不死身なのだと思う。

弟弟子のもとに送りだしたときも、他の男の妻になったと聞いたときも、自分が選ばれなかった今でさえ、この愛が消えゆくことはない。

罪を償うための戦いは終わらない。
誰かからの復讐に身を晒すことも生涯続くだろう。
けれどこの愛もこの身が朽ちるまでこの胸にある。

だから地獄を歩きながら、自分は『幸せ』なのだ。

「だが、やはり妬けてしまうよ」

あの蕩けるような甘さで自分を見つめる目がたまらなく恋しい。けれど、彼女が目覚めてももうそれを見ることはない。

自分が彼女を切り離した八年の間に彼女は自分の生き方を決め、幸せを見つけた。
その幸せはこれからも続き、その代わり彼女の中で自分は徐々に消えていくのだろう。

離れていた八年はあまりにも長すぎたのだ。

ヒュンケルの出発は早朝だった。
朝霧の中、教会前まで騎乗する一頭が牽かれてくると、ヒュンケルはまずリクシーの頭を撫でた。

「リクシー、あまりマァムを困らせるな」
「うん」

マァムとしっかり手を繋いでいるリクシーはしっかりと返事をした。
その様子にヒュンケルはわずかに口端を上げた。それから視線をマァムにずらす。
「マァム、オレの魂がおまえの中にあることを誇りに思う」
「ええ」
マァムは頷いて、それからヒュンケルの瞳を見つめた。昨夜とかわらず、そこに嘘はなかった。そのことを確認して、マァムもにっこりと笑った。ヒュンケルもまたそれに呼応するようにかすかに笑う。

そうしてヒュンケルは馬上の人となった。
マァムは幼子が彼をしっかり見えるように抱き上げた。その姿にヒュンケルは眩しいものを見るように目を細めた。

「・・・また会おう、・・・マァム」
「・・・気をつけて」

心は凪いでいて、よい別れだと、マァムは思った。
しかし王都への道に向かったその背中が、なぜか昔見た背中に重なった。
そのとき、抱き上げていたリクシーが突然暴れ始めた。

「いかないでっ！！」

さっきまで大人しくしていた幼子がヒュンケルを追いかけるために、マァムから降りようとする。
その声にこちらを振り返り、馬首を返そうとするヒュンケルに、マァムは大きく首を振った。

ここで彼が戻ってきても、別れの悲しみが長引くだけだとマァムは知っている。
それはリクシーにとっても、そしてヒュンケルにとっても。

こちらを見ているヒュンケルはその悲痛な思いを隠そうとしない。
リクシーのように涙は流しはしていなくても、その悲しみはそれ以上に深いように思えた。

「手紙を書く」

絞り出すようなヒュンケルの声が聞こえ、マァムはリクシーをぎゅうっと抱きしめた。
そして二人の悲しみを振り払うように、あえて明るい笑顔を見せた。

「大丈夫。また会える。大好き同士の二人を、神様が放っておくはずないもの」

そう言ってマァムはヒュンケルに先に行くように促した。
ヒュンケルは顔を歪めながらも頷くと、再び帰路へ向かった。

腕の中で幼子が心が千切れんばかりに泣いている。その子を抱きしめながら、馬上の背中を見た。

そして一瞬思った。
もし私もこの子のようにいかないで、と言えていたら、何かが変わったのかと。
もしかして、今見た彼の顔を、私も見ることができたのかと。

けれどそれも一瞬のことで。
今はもう、守るべきものがあるから。
強くあらねばならないから。

もう一度幼子を抱きしめる。
そして春の終わりとともに、自分のたった一度の『自分のための愛』が終わるのだと、霧に消えていく背中を見つめていた。